ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

Vol.51
2008

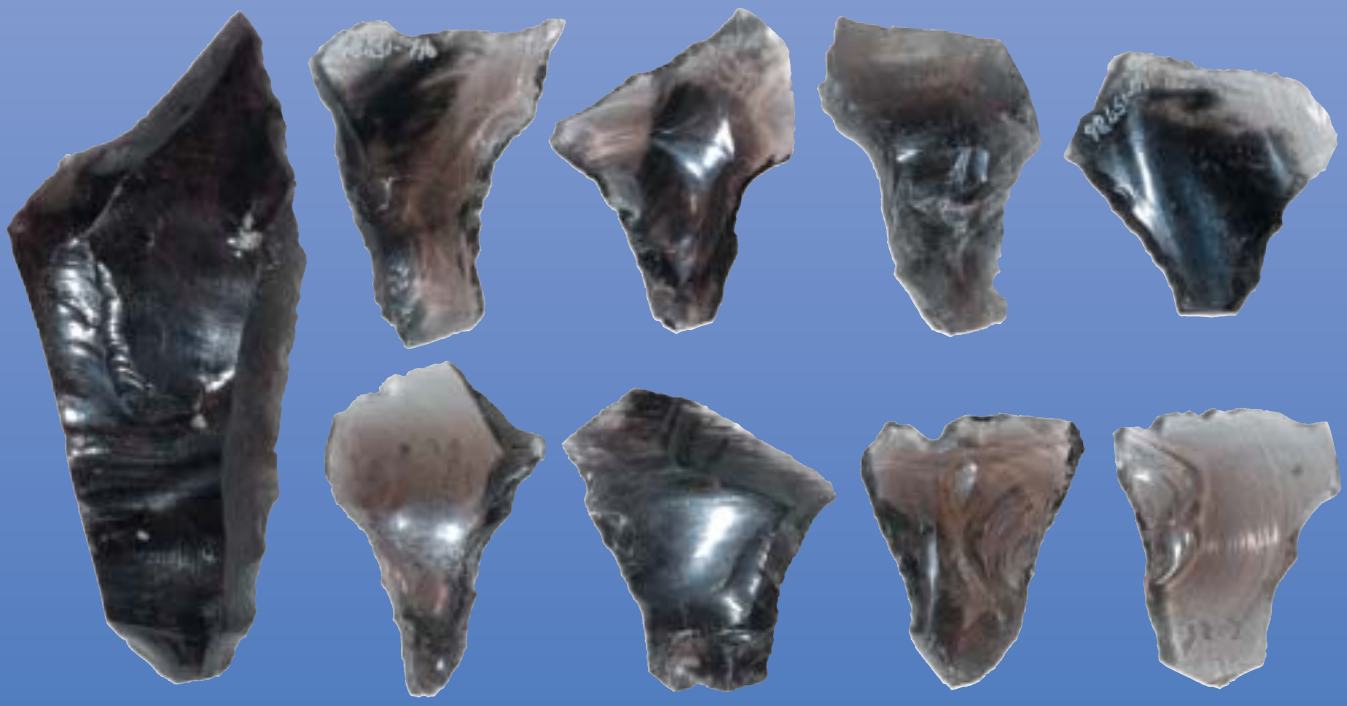
MEIJI UNIVERSITY MUSEUM

特集

2008年度明治大学博物館特別展

氷河時代の山をひらき、海をわたる

―日本列島人類文化のパイオニア期―



長野県中部高地黒耀石原産地に残された最古の足跡（長和町追分遺跡第５文化層：約30,000万年前、標高約1,300m）
黒耀石製の石ヤリ（ナイフ形石器・台形石器／左H=64mm）　長和町教育委員会所蔵

● 博物館ニュース
● 展示＆リサーチ　「研究資料アーカイブの試み―萩原龍夫旧蔵資料の整理について―」
「明治大学国際日本学部開設記念特別展＜クールジャパン＞を科学する―世界が注目する日本文化―」
● 市民レクチャー　「刑事部門所蔵の古文書について―出羽国村山郡関係文書―」
● 学芸研究室から　「埴輪は語る―茨城県玉里舟塚古墳の埴輪から―」
● 収蔵室から　「赤物玩具―あかのおまじない―」
● 入館者数の動き・団体見学の記録・M2カタログ

明治大学博物館

2008年度明治大学博物館特別展

—日本列島人類文化のパイオニア期—

氷河時代の山をひらき、海をわたる

Exploring Mountains and Voyaging the Sea : Pioneers in the Ice Age

いつ、誰が日本列島に最初に定着したのか。この、一見簡単な問いかけは、日本の考古学者と人類学者にとっては、最大の謎のまま今日に到っている。2000年に発覚した「前期・中期旧石器時代遺跡発掘ねつ造事件」は、日本列島人類文化の起源をめぐる研究を白紙に戻した。いまなお、さまざまな考え方にもとづいて、再構築がはかられているが、誰もが納得する定説はまだない。

ここで、さきほどの問いかけを、次のように言い直してみよう。「私たちと同じ創造力や社会的な能力をもった現代人（ホモ・サピエンス）が、日本列島に登場したのはいつで、どんな足跡を残したのか。」

港川人１号人骨
（レプリカ）
沖縄県具志頭出土
約18,000年前

東京都茂呂遺跡
黒耀石製石ヤリ
（46mm）
約25,000年前

現代人は、日本列島から遠くアフリカ大陸で16万年前を前後する時代に進化し、旧石器時代のうちに旧大陸とオーストラリアに移住・拡散したとする考えをもとに、世界各地で現代人がいつどのように登場するのか探求されている。現代人の登場を示す考古学的な証拠には、動物や人物を象った芸術作品、装身具、巧みに加工された骨の道具、体系的で多様な石器作りの技術などがあげられている。また、海洋や高山など自然環境の障壁を、文化的な手段—道具—を使って乗り越えて新天地をひらいたり、石器や装身具の原材料を広域にわたって流通させるようなネットワーク作りなど、現代社会のいしずえとなる社会的な営みは、現代人の登場によってはじまった。

ところで、黒耀石というガラス質の岩石は、日本列島の旧石器時代から縄文時代にかけて約3万年のあいだ連綿と石器の原材料に使われた。ところが、黒耀石の原産地は、関東中部地方では、氷河時代には住むには適さない1,500mを前後する山岳部や本土から50km離れた太平洋上にある。考えてみてほしい。「最初」に黒耀石を利用した人々は、当然、黒耀石原産地のありかを知らなかったはずである。最初の黒耀石発見者たちは「パイオニア」と呼ぶに相応しい。黒耀石利用の「パイオニア」たちは、どのようにして原産地を発見したのか。そして、それはいつだったのか……。

今回の特別展では、日本列島人類文化の起源の謎をめぐる、仮説の一つを紹介する。はたして、黒耀石利用の「パイオニア」たちは日本列島をひらいた「パイオニア」でもあったのだろうか。（島田和高）

黒耀石原石を消費地に持ち帰る

両遺跡は，黒耀石原産地と黒耀石消費地の両端で，黒耀石とヒトの移動によって関係づけられる。原産地と消費地の遺跡が結ばれる最古の事例。放射性炭素年代測定値に注目（BPは1950年から何年前の意。±は誤差）。両者間の距離は直線距離で約80km。当時の森林限界は標高約1,500m程度と推定されている。写真は、いまよりも過酷な気候条件の山岳部に挑んだヒト達が残した狩猟具。しかし、どうやって山にある黒耀石を最初にみつけたのか？

【黒耀石原産地の遺跡】
追分遺跡第5文化層の台形石器
鷹山遺跡群
（長野県長和町教育委員会所蔵）
31,039±298BP，
30,635±296BP
29,306±248BP（AMS）

黒耀石原産地に集団の一部を派遣

【黒耀石消費地の遺跡】
日向林B遺跡の台形石器
野尻湖遺跡群
（長野県立歴史館所蔵）
31,420±280BP，29,820±250BP
29,640±240BP，28,230±210BP
25,000±50BP（AMS）

●展示の構成

プロローグ：Welcom to the Ice Age
■ネアンデールタール人が自己紹介します。

テーマ I　：氷河時代の人類と自然
■化石人骨と石器で人類進化が一望できます。
■氷河時代は、とにかく寒いんです。

テーマ II　：現代人的行動とその出現
■ホモ・サピエンスの特性とは？
■黒耀石原産地発見のなぞ。

テーマ III　：日本列島人類文化のパイオニア期
■いつ誰が黒耀石をみつけたの？

テーマ IV　：氷河時代の山をひらき、海をわたる
■氷河時代の山と海は賑やかです。

テーマ V　：後氷期の山をひらき、海をわたる
■山を掘ったり舟で運んだり。

主　催：明治大学博物館
後　援：日本考古学協会・日本人類学会・日本第四紀学会・日本旧石器学会
会　期：2008年10月10日（金）～12月12日（金）
会　場：明治大学博物館特別展示室（駿河台校舎アカデミーコモン地下1階）
時　間：10:00～16:30（入場16:00まで）
入場料：300円（明治大学学生・教職員、明治大学博物館友の会会員、リバティアカデミー会員、明大カード会員、明治大学紫紺クラブ会員、高校生以下の生徒児童、愛の手帳・身体障害者手帳をお持ちの方は身分証・手帳の提示で無料）
連動イベント：次のページをご覧下さい。
問合せ：明治大学博物館（社会連携事務室 博物館グループ）
TEL 03-3296-4448（代表）、FAX 03-3296-4365
http://www.meiji.ac.jp/museum

日本列島最終氷期の風景を今に残す
ロシア・アルタイ地方、カラ・ボム遺跡周辺
2008年6月　撮影：島田和高

EARLY HOMINIDS

ICE AGE LANDSCAPE

MODERN HUMAN BEHAVIOR

OBSIDIAN PROCUREMENT

2008年度明治大学博物館特別展

「氷河時代の山をひらき、海をわたる―日本列島人類文化のパイオニア期―」

連動イベントのお知らせ

連動イベントⅠ　特別展開幕記念講演会

講　師：町田　洋　先生（東京都立大学名誉教授）
演　題：『氷河時代以降の自然環境の激しい変動とそれに耐えた列島の人々』
日　時：2008年10月10日（金）　14：00～15：30
会　場：明治大学駿河台校舎リバティタワー1001教室（地階）
受講料：無　料
申込み：必要ありません。直接、会場受付までお越し下さい。
問合せ：明治大学博物館（電話03-3296-4448代表）
※なお、講演会当日は、13：00より特別展開幕式典および展示解説を明治大学博物館のエントランス・ホールで執り行います。記念講演会に先立ちまして、ぜひお立ち寄りください。

連動イベントⅡ　第44回明治大学博物館公開講座「考古学ゼミナール」

特別展「氷河時代の山をひらき、海をわたる―日本列島人類文化のパイオニア期―」連動講座

オブシディアン・ロード
―東アジア石器時代のヒトとモノの動き―

講座の趣旨

1997年、明治大学博物館（当時）は、考古学ゼミナール『黒耀石の考古学』を開講しました。以来、10年余りが過ぎました。その間、「黒耀石考古学」が学界に産声をあげ、地道な成果をあげてきました。黒耀石（黒曜石）の研究は、いまや日本列島における人類文化の起源、周辺大陸と日本列島の関係、原産地と消費地の関係で営まれたヒトビトの暮らしぶり、といった重要なテーマに鋭く切り込むメスとなりつつあります。今回の考古学ゼミナールでは、黒耀石をめぐる石器時代考古学の最前線を紹介します。なお、明治大学博物館特別展「氷河時代の山をひらき、海をわたる―日本列島人類文化のパイオニア期―（前頁を参照ください）」と連動した講座です。各講義に関連する実物資料が、特別展で展示されます。講座と併せてご覧ください。

※「オブシディアン・ロード」とは「黒耀石のミチ」という意味です。

第1講	11月 7日（金）	黒耀石考古学からみた現代人的行動の登場	島田和高（明治大学博物館）
第2講	11月14日（金）	黒耀石原産地の大開発―北海道白滝遺跡群―	長沼　孝（北海道教育委員会）
第3講	11月21日（金）	黒耀石製石器の生産と流通―九州の黒耀石、海をわたる―	橘　昌信（別府大学文学部）
第4講	11月28日（金）	サハリン・シベリアの黒耀石と石器時代	小畑弘己（熊本大学文学部）
第5講	12月 5日（金）	環日本海旧石器文化回廊とオブシディアン・ロード	安蒜政雄（明治大学文学部）

講義時間：18：00～20：00
会　場：明治大学アカデミーホール（駿河台校舎アカデミーコモン3F）ほかを予定
定　員：150名
受講料：5,500円
※この講座は、「明治大学リバティアカデミー」特別企画講座です。お問い合わせ、受講のお申し込みは、リバティアカデミー事務局（電話03-3296-4423）までお願いします。

博物館ニュース

企画展「明治大学博物館友の会20年の歩み」が開催されました

博物館ニュース

2008年7月9日～29日まで、今年で創立20周年を迎えた明治大学博物館友の会の活動を紹介する企画展が開催されました。友の会の日頃の活動の様子のほか、独自の研究テーマを追究する6つの分科会の紹介と、会員がこれまでに収集・研究してきた個人コレクションの3部構成の内容で、会場には納谷廣美明治大学学長から20周年を記念して贈られた感謝状も展示されました。

会員による自主運営で受付と展示解説を担当して来場者対応を行ったほか、過去の出版物や遺跡見学会レジュメの無料配布コーナーなども設置され、盛況のうちに閉幕しました。

7月8日に行われた内覧会での解説風景

博物館友の会をテーマとした展覧会は全国でも珍しく、大学博物館友の会の草分け的な存在である明治大学博物館友の会の歴史と活動を広く周知したという点で、意義のある展覧会となりました。

来館20万人達成！！

博物館ニュース

去る2008年4月4日、2004年4月のリニューアルオープンの日から累計来館者数が20万人に至りました。当日は、記念すべき20万人目となった来館者の方に、杉原館長から記念品が贈呈されました。リニューアルオープンからわずか4年、これほど多くの方にご来館頂けた事をスタッフ一同感謝すると共に、これからもより多くの方に博物館にお越し頂ける様に活動を充実させていきたいと思っております。

杉原館長（左）と20万人目のお客様（右）

「海のシルクロード―東アジア海域文化の時代―（仮題）」展 来春開催に向けて準備中

博物館ニュース

文学部との共同企画で、中国の古代～近世交易関係資料をテーマとする展覧会を準備中です。

中国福建省は古くから海路による東西交流の出発点として栄えました。アジア諸国はもとより、遠く中近東やヨーロッパからも多くの人々が訪れ、豊富な物資が行き交いました。この展覧会には、福建博物院が所蔵する唐代から清代（10世紀～18世紀）にかけての様々な文物が出展される予定です。沈没船から引き揚げられた陶磁器など水中遺物をはじめ、窯跡や墳墓から出土した遺物など、すなわち、古代の陶俑、金銀器、宋代の青磁、天目茶碗、明清の青花磁器など、中国を象徴する文化遺産を一堂にご覧いただきます。その他、キリスト教徒・イスラム教徒・琉球人の墓碑、スペインの銀貨など、中国国家一級文物（国宝）を含む100点以上の文物が海を渡ってやって来ます。

なお、この展覧会は、愛知、東京、京都、山口を回る巡回展覧会として開催されるものです。東京会場は明治大学と学習院大学の2会場に分かれ、来年4月から5月にかけての約1ヶ月間を会期とする予定です。

研究資料 アーカイブの試み

―萩原龍夫旧蔵資料の整理について―

水谷　類（明治大学文学部非常勤講師・明治大学博物館研究調査員）

萩原龍夫旧蔵資料（仮名）の整理概要

故萩原龍夫氏（もと明治大学文学部教授。昭和60年6月19日に68歳で死去。以下では故を省く）が生前、研究上収集された書籍と各種研究資料（画像資料、映像資料、音声資料、印刷資料、古文書等原資料及び写し、資料カード類、等々）は昭和60年の同氏の死去後、ご遺族から明治大学に寄贈された。その内、書籍等は明治大学図書館に移管されたが、研究資料とも言うべき萩原龍夫旧蔵資料は現在、明治大学博物館収蔵庫に保管されている。旧蔵資料の総点数は現在調査中のために未詳であるが、基本的に明治大学大学院にあった萩原研究室に置かれていたものと、ご自宅に置かれていたものとを合わせ、段ボール箱24箱分（整理前）、ロッカー2本分（段ボール箱約10箱相当）にのぼる。

明治大学文学部教授上杉和彦氏の主導のもと、同大学非常勤講師水谷類（筆者）と同大学博物館学芸員日比佳代子氏による資料整理が開始されたのは平成20年2月からであった。整理にいたったそもそもの経緯は、水谷が萩原龍夫氏の資料の閲覧と現状について博物館に問い合わせたことからはじまり、その後日比学芸員と上杉氏による協議を経て後、上杉氏の提案により整理事業はスタートしたのである。整理作業の前提となる保管箱・保管封筒詰め作業は、上記3名と博物館員のほか、上杉研究室に所属する大学院生、学部学生の協力を得て行われ、現在は博物館の事業として実施されている。以下、資料整理の目的と今後の見通しについてご報告する。

資料整理風景

「萩原龍夫」という異端

萩原龍夫氏の研究業績について、日本歴史研究、民俗学研究に携わる人にとっては贅言を要しないと思われる。その主な業績として、たとえば戦後における中世宮座研究のひとつの頂点を示したと評価される『中世祭祀組織の研究』（昭和37年、東京文理科大学博士学位論文。昭和50年増補版）をはじめとして、神社・寺院・修験道等の宗教勢力と中央・地方政治勢力との確執・均衡の狭間で営まれる中世村落祭祀の姿を丹念に掬い出した『神々と村落』（論集。昭和53年）、「絵解き」を業とする熊野比丘尼という民間宗教者の活動をはじめて本格的に世に知らしめた『巫女と仏教史』（昭和58年）などを挙げることができよう。中世・近世史、宗教史、歴史民俗学、地方史・郷土史研究等の各分野において、萩原氏は珠玉の業績を残した。

プリント写真とネガフィルム等の現保管状況

そうした歴史民俗学的研究とは対照的に『武州文書』（昭和32年。後、『新編武州古文書』上下。杉山博氏との共著）や『諸州古文書・相州文書抄』（昭和37年）、『中世東国武士団と宗教文化』（論集。平成19年）に見られるとおり、萩原氏は、関東戦国史の研究にも評価の高い実績を積み上げたことで知られている。

氏の発表論文は、昭和12年から死後の昭和63年に公表されたものを含めると230編余にのぼり、その多くが歴史学と民俗学のあわいに取り残された分野、テーマに目を向けたものであって、独自の学風を形成した。（以上の業績に関する記述は『中世東国武士団と宗教文化』巻末に掲載された「萩原龍夫年譜・著作目録」（西垣晴次・佐野和子両氏の整理）を参照している）

萩原龍夫氏が、筆者（水谷）をはじめとする明治大学学生等に絶えず語っていた言葉が、氏の主宰していた史料と伝承の会会誌「史料と伝承」の扉に掲げられている。それは「私たちの方針」と題された以下のような宣言文であった。

（一）事実を明らかにするために、私たちは、史料と伝承とをふたつながら、たいせつにする方針である。

（二）史料もて史料を、伝承もて伝承を解釈するのは当然である。それとともに、伝承もて史料を、史料もて伝承を解釈することに努める、というのが私たちの方針である。

一九八〇年七月　史料と伝承の会同人

この宣言はそのまま、生涯に亘る萩原龍夫氏の研究姿勢を表していると言える。史料（文献史学）と伝承（民俗学）のふたつの世界に両足を掛けつつ、おのおのがそれ自身だけでは決して提示しえない歴史的・社会史的な事柄を明らかにしようとするものであった。

しかし、そうした研究方法には、他人には知りようもない困難さがあったことは否定できない。柳田国男以来、文献史学と民俗学とは基本的な研究視点、問題意識の相違が歴然としてあり、ある種の異端的な存在として両陣営からの批判に晒されることもしばしばであった。それとともに、史料と伝承を駆使するための方法論的な積み上げも、まだ充分とは言えなかったからである。

その中で、萩原氏がとりわけ意を用いていたのが、自身による徹底的なフィールドワークの実践と、学会や学閥、中央と地方を越えた若手の育成であった。全国各地には今も、萩原氏の薫陶と学問的影響を受けた大勢の歴史学・民俗学・郷土史の研究者が活躍し、その範囲はアカデミックな大学、博物館などに留まらず、郷土史研究家、教員、教育委員会所属の研究者などに及んでいる。「史料と伝承とをふたつながら、たいせつにする」という研究姿勢は、彼らによって今日も脈々と伝承されているに違いない、と期待したい。

膨大な映像資料とネガフィルム

研究資料アーカイブの目的

萩原龍夫氏の研究姿勢は、氏のこれまでの数々の業績に確かに結実しているのだが、しかし縦横無尽だったその研究方法（あえて萩原史学と呼びたい）は、先程の提言以外に示されているわけではない。文献資料に資料的な限界があり、一方で民俗伝承そのものが危機に瀕している現在、両者を対等に評価しながら日本歴史の研究、日本社会史の研究、民俗学研究を追及することはほとんど不可能に近くなっているのではなかろうか。史料と伝承の両立に一生を費やした萩原氏の方法論的葛藤を知ることは、多くの研究者にとっても有益であるに違いない。

さらに重要なことは、戦中から戦後、そして晩年の昭和50年代に亘って萩原氏が収集した全国各地の民俗学的、文献史学的素材のなかには、その土地で、その時にしか見られなかったものが数多くあるとともに、「萩原史学の視点」でしか見出せなかった素材もある。このことに思いをいたす時、萩原龍夫旧蔵資料には、ますます大きな意味が与えられることであろう。

研究者の業績は当然のことながら、その論考と著作、社会的な活動などによって評価されてきた。しかし、その業績を産み出した研究プロセスと研究に寄せる思想・方法論、さらには道半ばにして積み残されたに違いない無数のテーマ等々は、研究者の死とともに消滅してしまうのが常であった。しかしながら、研究者の学問的遺産は、残された研究資料のなかに手付かずのまま、少なからず保存されている。その研究者の意図や研究姿勢、方法論が、カード、草稿原稿、収集資料などに深く刻まれているのではないか。

以上のことを考慮すると、萩原龍夫旧蔵資料を整理作業は、以下のようなふたつの目的を持っていることになろう。

（一）萩原龍夫氏の独自な研究姿勢とその方法論を、次代の研究者に伝承する

（二）同氏の収集した数々の研究資料を保存・公開することで、現時点ではもはや収集できなくなっている貴重な資料を活用する

こうした目的達成のため本整理では、次のような手順を採用すると同時に、将来的な公開に向けた模索を続けている。

1.資料類の散逸を防ぎ、現状での有機的なつながりを重視して、保管状況を可能な限り現状保存するか、復元可能な整理を施こす

2.資料の元の所在地、資料の関係地ごとに検索できるような索引項目を設定する

3.資料が関係するであろう複数のテーマを索引項目として設定する

4.資料の公開、閲覧を前提として、デジタルデータベース化する

資料のなかでも特に画像資料（写真プリント・ネガフィルム・ポジフィルム・複写）、映像資料（8ミリ等）、音声資料（音声テープ）などのデジタルデータ化は、フィルムの劣化、退色などを考慮すれば、早急に実施すべき作業であろう。萩原氏が特に熱心であった民俗的な祭り、芸能を撮影した映像と写真の資料は膨大である。戦後の高度経済成長期（1950～60年代）と近年の急激な地域社会の変容（1990～現在）という、2度の大きな社会変動期を経過するなかで、祭り、民俗伝承の多くが崩壊し、消滅している。そうしたことから言っても氏の収集した研究資料は、民俗伝承の復元・研究に、今後大きな役割を果たすことであろうことは間違いない。

研究者の残した膨大な研究資料が大学などの研究機関、博物館などに寄贈、収集される事例は、今後、急増すると考えられる。その意味で本作業が、これからの「研究資料アーカイブ」を推進するひとつの試みとなることを期待している。

明治大学国際日本学部開設記念特別展 〈クール・ジャパン〉を科学する

―世界が注目する日本文化―

森川　嘉一郎（国際日本学部准教授）

「国際日本学」という名称

明治大学はこの春、「国際日本学部」という新学部を開設した。その学部名を目にしたとき、おそらく多くの人は、奇妙な印象を抱いたのではないだろうか。今は教員として当事者となっている私も、最初に伝聞でその名を耳にしたときには、思わず聞き直したほどである。所属することが決まってからは、人に知らせる度に、いったい何をする学部なのかと、説明を求められた。この5月に行われた標記の開設記念特別展は、当学部の内容を内外に示す必要性に応えるものでもあったろう。実施された展示は、15以上のセクションによって構成される多岐に渡ったものとなった。その様子については図版を参照されたい。

他方、雑談の中で国際日本学部を手短に紹介する必要が生じたときには、やや矮小化した説明になるが、「日本の文化や社会について、海外へプレゼンテーションできる人材を育成する学部です」というと、たいていの人は「なるほど」とうなずいてくれる。『クール・ジャパン』みたいなことをする学部かな」と、連想してみせる人も幾人かいた。私が漫画・アニメ・ゲームなどを研究対象としていることから、そうした人間を登用したことの意味合いを推察したのだろう。

もとよりそのような連想や納得の背後には、日本的なるものの海外受容に対する社会的関心の高まりを読み取ることができる。それは、当学部が企画された背景の一つでもあったろう。しかし、さらに大きな状況を反映しているのは、むしろ、「国際日本学部」という名称が反射的に抱かせる奇妙な印象、あるいは、違和感の方ではないか。その正体は、何か。

もともと日本における大学制度は、明治期に、黒船以降の圧倒的な外圧の下、西洋列強に対抗するための国家体制を構築する一環として欧米から移植されたものである。法・医・工・文・理といった学科構成、学位や教授職などのシステムは、基本的に欧米、とりわけドイツの大学から引き写されている。少人数制の演習を「ゼミ」と呼ぶ習慣に、その名残を見出すことができる。

旧帝大は、中央集権的な国家体制を担う官僚の養成機関であり、その他諸々の大学は、全国の労働人口を家業から引き離してホワイトカラーに仕立て、会社組織に部品として供給するための工場を担ってきた。「勉強して良い大学に入り、良い会社に入り、出世して郷里に錦の御旗を飾る」という人生観は、そうした社会システムとともに日本の人口に膾炙した。いずれも欧米の産業経済に互していくという大義の下、政府が外圧を利用して実施してきた国策である。結果として日本は未曾有の経済成長を遂げ、産業技術立国となったが、その過程で地域のイエや共同体は解体され、街並みは歴史的な面影を喪い、欧米的な文化やライフスタイルの急激な流入が、それまでの伝統を断絶させた。大学はいわば、そのような近代化の装置の一つとして機能してきたのである。

外圧と日本文化

しかし歴史をさらに遡れば、日本は昔から外圧による変転を幾度も反復させている。「日本」という国号それ自体が、7世紀後半における唐の膨張がもたらした緊張により、急速に国家体制が整備される中で成立したものである。この時代には朝鮮半島から輸入された技術で西日本各地に防衛施設が築かれ、さらに舶来の宗教である仏教で国を安定させるべく、東大寺や大仏、国分寺などが、8世紀にかけて建設されていった。その間、遣唐使を通して唐の技術や制度、文化や仏教などが移植され続けた。国の中枢が、外圧を権力に換え、舶来の文化を権威に換えて運用することによって、日本という国は出現したのである。

ところが9世紀中頃から唐の影響力が弱まると、日本では文化の重心が徐々に唐風から和風へと移り、９世紀末には遣唐使が廃止されている。海に囲まれた日本は、天然の鎖国状態となる。当時、識字層の間では中国渡来の漢字が用いられていたが、その漢字が平仮名へと崩され、日本語をストレートに表記することが可能になっていった。そして11世紀に入る頃には『枕草子』や『源氏物語』といった日本文学の至宝が、女性を書き手として成立する。外圧の減衰とともに、数百年の時をかけて、中枢から外れた場で、文化が熟成される。乱暴な粗筋だが、日本の文化的達成には、そのような過程が見出せる。

他方、文化が国風化していくと、かつて国外から移植されたテクノロジーは、それと反比例するかのように退歩する。前述の東大寺と大仏は、12世紀に源平の争乱の中で焼け落ちる。しかし日本の鋳物師や大工の技術は、当時、4世紀前に造られた大仏や大仏殿の修復や再建ができなくなるまで後退していた。結果、今度は宋から渡来していた技術者の力と、宋の建築構法が導入されている。そして13世紀に蒙古による国外からの侵攻が起こると軍事的な中央集権化が促され、文化的にも宋や元の影響が強くなった。

しかし蒙古襲来から16世紀までの3世紀間は、再び大きな外圧が不在となる。すると、中央に振れていた権力が地域へと分散し、それと併行して、茶の湯や茶室、能楽、龍安寺の石庭などを生み出す文化的に豊穣な時代が訪れる。16世紀になると南蛮貿易とともに鉄砲とキリスト教が日本にもたらされるが、それらが国内に強い緊張を引き起こした反動から、江戸時代には200年間の鎖国に突入する。そしてその間、新たに独得の文化が発達する裏で、日本の軍事技術は火縄銃で停止したままになる。日本の文化とテクノロジーの歴史は、このように繰り返し外圧によって分節されてきた。

江戸の鎖国期には、歌舞伎や浮世絵に代表される庶民の文化が発展した。ここで注目すべきは、権力者によって支えられた狩野派を筆頭とする美術品よりも、当時は美術とすら見なされていなかった浮世絵の方が、後に国際的な影響を及ぼし、評価を得るにいたっているということである。世界の文化史を見渡してみれば、権力が中央に集中し、その権力の強さが美術や建築に表現されることによって、代表的な文化的達成が生まれることが多い。ところが日本においては、権力者による外圧の運用が減衰した時期に、権力の中枢から外れた場で、独特の文化的発展が起こるという逆のパターンが目立つ。

『コミックマーケット』『ヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展日本館「おたく：人格＝空間＝都市」展』（共に構成：森川嘉一郎）

「世界が注目する日本文化」

外圧を受けると技術力が高まり、舶来の文化が権威的に運用される。そして外圧の減衰とともに、その国風化が起こる。島国である日本の歴史は、そのような外圧と国風化、あるいはソトとウチの構図が、弁証法のような構造となって貫いてきた。ここで「国際日本学」という名称に話を戻すと、それは、「国際」という外向きの指向と、「日本学」という国学めいた内向きの指向を、それぞれ連想させる語の複合語となっている。先述の違和感の正体は、対立的な概念を接ぎ木しているという印象によるものなのではないか。そしてそれは、「日本の文化や社会について、海外へ発信する」といった、簡単な説明で止揚できてしまうほど単純なものではない。

例えば漫画・アニメ・ゲームを大学で扱う動きは明治大学以外でも急増しているが、今のところ、舶来の技術や文化の移植、並びに権威的な運用という、外圧機関としての大学がこれまで特化してきたシステムに漫画・アニメ・ゲームを載せようとする構図になっている。教科化に際して、各大学で通底して「世界からの評価」を援用しようとする傾向に、それは端的に表れている。

するとどうなるか。「世界が注目する日本文化」を大学で扱い始めると、それは、日本文化を「世界が注目する日本文化」と「世界が注目しない日本文化」に分断し、結果として世界の注目に沿わせようとする外圧を日本文化にかけることになりかねないのである。実際問題として、省庁がアニメを「コンテンツ産業」として注視し始めてから、海外で評価される「良いアニメ」とそうでない「悪いアニメ」という評価軸でアニメを分けようとする傾向が、散見されるようになっている。長い時間を要する文化的成熟にとって、未成熟な段階で価値観が外圧によって上書きされかねない状況は、注意を要する。

「世界からの評価」を援用するだけではなく、むしろそれがもたらしうる外圧を適確にコントロールするための方法と戦略の構築、およびそのための人材の育成が、国際日本学部の重要なミッションとなるのではないだろうか。〈クール・ジャパン〉は、冷徹に科学する必要がある。

『日本のアニメ文化の歴史』（構成：森川嘉一郎）

『擦り合せ型製品　日本企業の得意とするものづくり』、『モジュラー型製品　中国の事例』（構成：呉在烜）

『Western Impact～和洋文化の邂逅』（構成：外山徹）

刑事部門所蔵の古文書について
～出羽国村山郡関係文書～

日比 佳代子（刑事部門学芸員）

明治大学博物館刑事部門は近世古文書を中心に約二六万点の資料を収蔵しており、既刊の『刑事博物館目録』『内藤家文書目録』などによって公開されている文書の内容を知る事ができる。（明治大学刑事博物館は2004年4月の学内三博物館の統合により明治大学博物館刑事部門と改称した。この為、それ以前に刊行された目録や資料集の名称は「刑事博物館」となっている。）収蔵古文書のうち、特に閲覧要請が多い文書群の一つに、出羽国村山郡（図1 参照）関係の近世古文書がある。

出羽国村山郡

村山郡は天保期の記録で石高三六万六〇〇〇石余を有する地域であるが、元和八年（1622）の最上氏改易後は幕領を含め複数の領主に分散支配され、近世を通じて領主の交代、領域の変更が多い地域であった。特に、近世初頭は村上郡における幕領の拡大傾向が顕著で、延沢銀山の直轄化と銀山における人足米供給地確保の為に幕領拡大が図られ、その後、延沢銀山が衰退すると、定期市場を中核とする地域が幕領化されて、流通の拠点に代官所が配置された。また、最上氏改易後に鳥居氏二二万石で成立した山形藩は保科正之→松平直基→松平忠弘→奥平昌能→堀田正仲→松平直矩→松平忠弘→堀田正虎→松平乗佑→秋元凉朝→水野忠精と頻繁に領主が交代し、貞享二年（1685）堀田氏の入封時に九万石から十万石に石高が増加した事例を除けば、領域は漸減傾向にあり、弘化二年（1845）に水野氏が山形藩領を引き継いだ時には石高は五万石まで縮小されていた。近世初頭の幕領拡大傾向、旗本領、諸藩領の分領の設置、それらに伴う既存領域の変更や縮小といった要素が絡み合い、村山郡の領有状況は複雑化の一途をたどった。

村山郡を特徴づけている要素の一つが農民的商品の生産である。この地域は、紅花・青芋・たばこ等の商品作物の栽培が盛んで、特に最上川中流域で良質の紅花が大量に生産され、最上川の舟運を通じて京都や大坂に積み出された。複雑な分散所領形態と小規模領主という制約ゆえに、領主が農民的商品市場を掌握しがたかった事が生産には有利に働いたとも指摘されている。そして、この豊かな商品作物はそれらを取り扱う荷主商人や、商業を営む一方で土地集積を行う質地地主を生み出し、この地域に多くの豪農を誕生させた。これらの豪農の支配に対し、村山郡では多くの一揆が発生しており、この為に小作人対策を主目的とした豪農の講集団なども形成されている。

また、政治的な側面においてもこの地域には興味深い動きが見られる。近世社会は、構造的に領主行政の一部を被支配階層に委ねる事を不可避とするが、村山郡の場合は地域的特徴からこの傾向が他よりも強く見られる。小規模領主による分散領有形態と頻繁な領域変更の為、この地域はそもそもの領主の統治機構が弱い。一方で、地域社会では、支配領域を越えたまとまりが生み出されており、農民的商品市場の発達によって生じる市場調整、生存保障、治安対策など様々な問題の解決には、広域的な対応が必要となっていた。この様な状況を補う為に、郡内の村役人や豪農などの有力農民が「郡中惣代」に委任され、合議によって「郡中議定」を制定し地域運営が主体的に行われていった。

農民的商品生産の隆盛、全国市場との密接な関係、豪農の存在や彼らのネットワーク、地域社会の行政的力量と主体的な運営、地域運営と豪農の家経営とのせめぎあい、一方で村に残る名子などの隷属民の存在、など。これらの要素をどの様に理解すればよいのか、またこれらの要素からどの様な近世社会像が描けるのか。出羽国村山郡は近世社会を考える上でのキーワードにあふれた地域と言えよう。（『角川日本地名辞典6　山形県』（角川書店、1981）、青木美智男『近世非領国地域の民衆運動と郡中議定』ゆまに書房、2004）、岩田浩太郎「豪農経営と地域編成（一～四）」（『山形大学紀要』32-2、33-1・2、34-1）より）

明治大学博物館刑事部門所蔵村山郡関係文書

現在明治大学博物館で公開している当該地域の文書数は28箇村に及ぶ。それをまとめたものが表1である。表1「目録号数」は「刑事博物館目録」の号数を示しており、入手時期の差から収録目録が分割されているものもある。「文書名」については、村名で示された文書と村名＋家名で示された文書があるが、基本的には村名が同じものは同一文書である。また、表1の村を村山郡の地図上に落としたのが図1である（各村の番号が地図上の位置を示す）。「文書所蔵村」として示した楕円の大きさはある程度各村の石高に対応させている。表1から分かる様に、明治大学博物館では2000点を越える古文書を5タイトル、1000点前後の古文書を4タイトル所蔵しており、特に山口村文書（約9400点、目録20・24・41号を合冊した「刑事博物館目録　別冊」あり）、長崎村柏倉家文書（約8000点）の文書数が突出している。山口村文書は山口村中組名主伊藤儀左衛門家旧蔵の文書で、商業・地主経営など家の経営に関わる史料、村政や郡中議定関係の史料、明治期の山論関係の史料などが充実している。長崎村柏倉家文書は享和年間まで名主を務め、幸生銅山の御用達も務めた柏倉家旧蔵の文書で、商業・地主経営など家の経営に関わる史料が豊富に含まれている。二つの文書群の他にも良質の文書が大量に存在しており、表1の文書数を合計すればその数は約3万7000点余に上る。出羽国村山郡に関する研究は多く、厚い研究蓄積のある地域ではあるが、明治大学博物館では、これらの文書の利用が今以上に進み、多くの研究者によって活用される事を期待している。

＊閲覧方法の詳細は博物館ホームページ参照の事。

文書名	番号	村　高	文書総件数	目録号数
行沢村文書	1	339石	922	17
田沢村森家文書	2	753石	2678	18･30･45
大久保村文書	3	4120石	277	45
湯野沢村文書	4	2664石	396	45
岩城村文書	5	880石	1086	30・45
東根村文書	6	2011石	1	30
宮崎村文書	7	401石	105	45
蟹沢村文書他	8	1654石	745	17・30
北口村文書	9	91950石	943	17
北口村細谷家文書			12	30
北口・新町村文書			782	30
野田村文書	10	805石	272	30･45
原方村文書他	11	498石	19	30
新町村文書	12	1450石（寛文12）	768	17
新町村高橋家文書			78	30
荒町村文書他	13	938石（延宝5）	13	30
観音寺村岡田家文書	14	1001石	5404	16
大町村文書	15	439石	332	17
溝延村文書	16	4156石	1	30
山口村文書	17	2020石	9378	20･24･41
金谷原村文書	18	322石（寛文12）	8	44
金谷原村安孫子家文書			999	44
長崎村柏倉家文書	19	3358石	8373	19･26
土橋村文書	20	384石	238	44
新宿村文書	21	331石（天保5）	34	25
前田沢村文書	22	311石（元禄3）	113	25
前田沢村今井家文書			2075	25
新宿村・前田沢村文書			724	19
内表村文書	23	1219石	3	44
鮎洗村文書	24	1126石	9	44
陣場村文書	25	938石	489	44
陣場村斉藤家文書			76	44
江俣村文書	26	632石	2	44
志戸田村文書	27	2820石	5	44
八日町文書（医師黒田家文書）	28	2211石（寛永13）	28	44

表1　明治大学博物館刑事部門所蔵 出羽国村山郡関係文書一覧
村高は正保年間。それ以外は表中に注記。

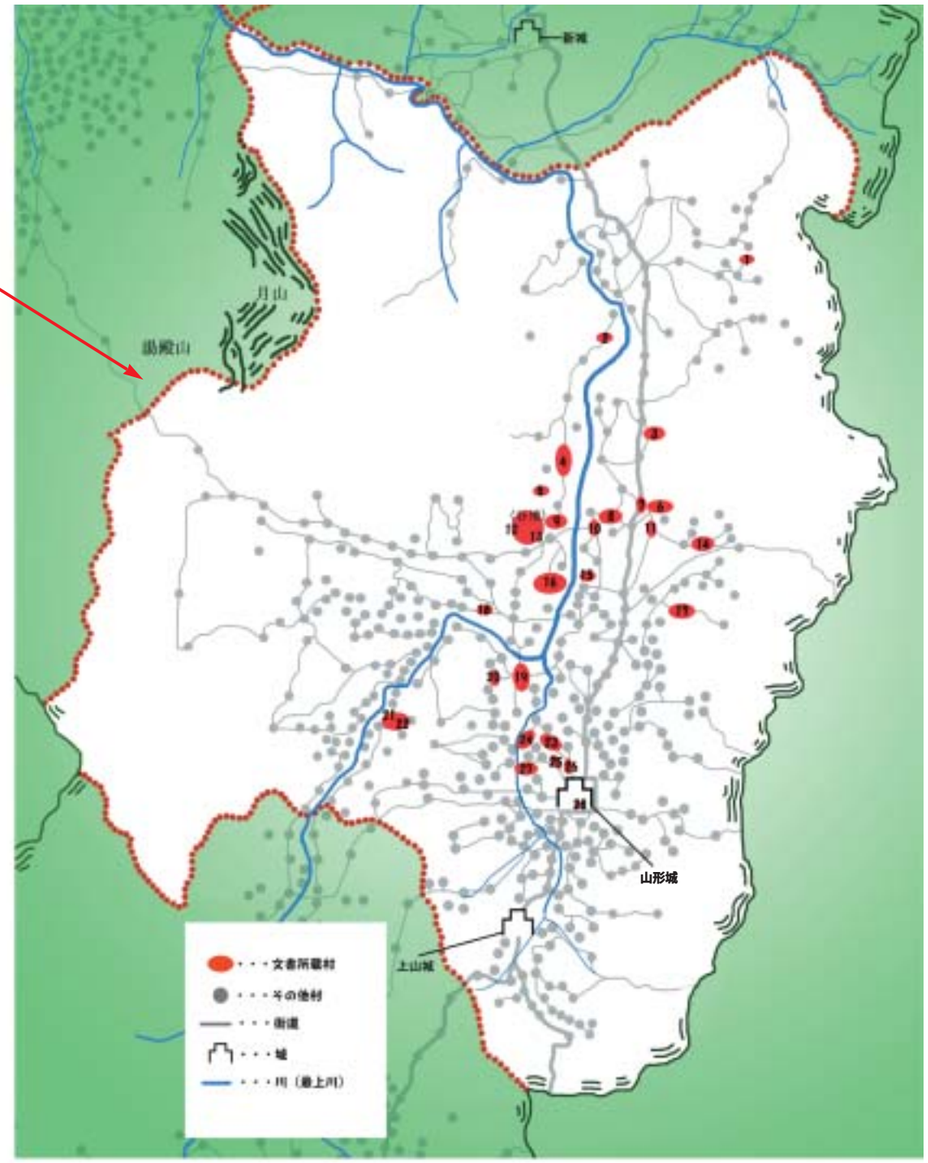


図1　明治大学博物館刑事部門所蔵 出羽国村山郡関係文書 対応村図
『角川日本地図辞典6山形県』正保出羽一国絵図、『日本歴史　地理体系6山形県の地名』（平凡社、1990）をもとに明治大学博物館（松浦）が作成。

刑事部門古文書閲覧室からのお知らせ

文学部史学地理学科日本史専攻の落合弘樹教授の指揮のもと、本学学生が中心となって整理をすすめてきた『内藤家文書近代史料』の仮目録が完成した。この史料が歴史研究に利用される事により、近代における旧大名家と地域との関係、旧大名家の家経営の実態などが明らかになると期待されている。仮目録は博物館閲覧室にて公開しているので多くの方にご活用頂きたい。また、『内藤家文書』の近世史料については、すでに目録が刊行され歴史研究に活用されているが、特に閲覧要請が多い内藤藩家臣の由緒書について、予約なしで自由に閲覧できるように、マイクロフィルムの紙焼きを博物館図書室に配架した（表2参照）。こちらも合わせてご活用頂きたい。

史料番号		内容
内藤家文書1-30由緒・分限　1由緒書		家士ノ由緒ヲ書上シタモノデ藩初ヨリ享保一七年ニ至ル貼紙アリテ元文年間ニ及ブ、組別トナス
	（1）	内藤治部左衛門組
	（2）	同組
	（3）	加藤又左衛門組
	（4）	近藤惣兵衛組
	（5）	穂高吉兵衛組
	（6）	睹組
	（7）	御中小姓組
内藤家文書1-30由緒・分限　2古由緒書		藩初ヨリ明和九年正月マデ　いろは順
	（1）	イの行　いろはにほへと一冊
	（2）	チの行　ちりぬるをわか一冊
	（3）	ヨの行　よたれそつねな一冊
	（4）	ラの行　らむうゐのおく一冊
	（5）	ヤの行　やまけふこえて一冊
	（6）	アの行　あさきゆめみし一冊
	（7）	エの行　えひもせす一冊
	（8）	断絶部　一冊

表2　紙焼きを配架している内藤家文書の史料番号と内容

学芸研究室から

埴輪は語る

―茨城県玉里舟塚古墳の埴輪から―

忽那　敬三（考古部門学芸員）

1. 埴輪がもつ多様な情報

埴輪（はにわ）は、土偶と並んで最も一般に親しまれている土製の考古資料である。土偶は縄文時代に集落での祭祀に用いられるものであるのに対し、埴輪はマウンド（盛土（もりど））をもつ墓である古墳の上に並べられ、墓上での供献や辟邪（へきじゃ）といった祭祀および生前の生活や葬列の様子、または儀礼そのものを表現したと考えられており、古墳時代に盛行した。古墳時代に最も特徴的な古墳の形として挙げられる前方後円墳は、北は岩手県から南は鹿児島県に及ぶ全国に分布しているが、埴輪もまた同様の分布範囲を示している点で古墳の築造と埴輪の使用は同様の原理のもとで全国的に波及したと考えられる。埴輪は粘土に小礫などを混ぜて焼く土器の一種であるため、製作技法や胎土（たいど）、形状など様々な情報を内包している。それらを追究することで、埴輪を製作した工人やその集団、ひいては工人集団の動向に大きな影響を与えた首長同士の関係をも推測することが可能なのである。明治大学博物館では、明治大学考古学研究室が調査した数多くの埴輪を所蔵しているが、その中でも茨城県玉里舟塚（たまりふなづか）古墳（以下舟塚古墳と略す）の埴輪は多条突帯をもつ円筒埴輪と多彩な形象埴輪群からなり、従来から県内でも屈指の資料とされ畿内との関係も論じられてきた。当館では、この舟塚古墳の埴輪の再整理を2007年から始めているが、新たに明らかになった点を中心として、舟塚古墳と畿内との関係についての予察を試みたい。なお、再整理作業では明治大学文学部史学地理学科考古学専攻生の一枚田薫・大村冬樹・鶴見諒平各氏の協力を得た。

2. 舟塚古墳の埴輪群

舟塚古墳は、霞ヶ浦北岸の高浜入りの北岸に半島状に突き出た旧玉里村（現小美玉（おみたま）市）上玉里に位置する前方後円墳である。標高24m前後の台地上に築かれており、霞ヶ浦湖岸からの距離は約1kmであるが、現況では墳丘から直接霞ヶ浦を望むことはできない。発掘調査は明治大学考古学研究室により1965（昭和40）年から5次にわたって行われ、後円部頂から墓坑に粘土を充填して周囲を300枚近い板石で裏込状に積んだ二重の箱式石棺からなる特異な埋葬施設を検出したほか、墳丘を二重にめぐる50本近い円筒・朝顔埴輪列と、墳丘西側で人物・家・馬からなる数十体の形象埴輪群が集中して配置されたとみられる造り出しを検出している（大塚・小林1968、1971）。なお、周壕は西側のみで、東側には墳丘裾から約30mの位置に境界を示すとみられる円筒埴輪列が並ぶ。また、1997年には明治大学考古学研究室によって精密な再測量が行われ、全長が72mという規模であることが確認された。

舟塚古墳は特殊な埋葬施設とともに、大量に出土した埴輪群が東日本でも有数の良好な資料であることから、これまで数々の論考で取り上げられてきた。これまで明らかになっているのは、家形埴輪2、馬形埴輪2、人物埴輪29（うち冠をかぶる男1、武人12、槍を構える武人1、盾持４）、器財埴輪3（新井2003）で、人物には笄帽をかぶる人物1、襷をかけた女性1、帽子をかぶる男2（大塚・小林1971）、両手を挙げる巫女1（黒澤2004）が知られている。このほか、太平洋戦争中の防空壕掘削時に武人2と騎馬人物像、大形の馬形埴輪の頭部と舟塚古墳という名称の由来ともなった舟形埴輪の出土があったと伝えられている。

写真1　鞍部西側中段の円筒埴輪列

一方で、舟塚古墳を特徴付けるもうひとつの要素が大形の円筒埴輪群である。円筒埴輪は、そもそも墓上祭祀に用いた特殊な壺とその壺を置く器台が変化し、周囲と墓域を区画するという役割を負ったと考えられるもので、円筒埴輪の一種である朝顔形埴輪は上部が壺の形状を呈し本来の姿を残している。円筒埴輪は古墳の墳丘を囲むものであるため、その本数は1基の古墳あたり数百から多いものでは数千の単位にものぼり、古墳が大きくなるほど使われる本数は増す。舟塚古墳では、検出本数から算出すると総数は650本あまりと推測されているが、特筆されるのは1本あたりの大きさで、底径25～30cm、口径35～45cm、高さは76～82cmに達し、朝顔形円筒埴輪は高さ110cmを超えるほどである。しかも本体である筒の表面に帯状に粘土紐を貼り足す「突帯（とったい）」は、現在確認されているすべての個体で6本という原則が貫かれている。通常、全長100mを超える大形の前方後円墳でも突帯は3本から多くても5本であり、古墳時代を通じて6本以上の突帯をもつ円筒埴輪は棺用に特別に製作されるものを除くと非常に稀で、畿内の大王墓や有力古墳以外ではきわめて少ない。かつて三浦茂三郎は古墳時代を通して6条の突帯をもつ円筒埴輪の分布から畿内との関係を指摘したが（三浦1986）、舟塚古墳が築造された6世紀に限って新たに確認された資料を加えれば、関東では七輿山古墳、綿貫観音山古墳、富士山古墳（群馬県・栃木県）といった、規模・副葬品から当該期の有力古墳と考えられるもののみである。畿内でも、継体天皇の墓と考えられている今城塚古墳が挙げられる程度にすぎず、いかに特殊なものであるかを示唆していよう。

写真2　斜格子線刻をもつ円筒埴輪の出土状況

また円筒埴輪は1古墳あたりの使用量が多いため、複数の工人あるいは製作集団から供給されるので個体ごとの製作技法において個性が出やすい。ところが舟塚古墳の円筒埴輪は使用される土の違いはあるが外面は縦方向のハケメを入れ内面はナデを施すという製作方法で統一され大きさもおおよそ2種に分けられるが、口径を除けばその差は5cm程度に収まっており斉一性が高い。さらに、このような大形の円筒埴輪は重量があるため形が歪む例が多いが舟塚古墳の資料にはそうしたものがほとんどなく、上方へ行くほど緩やかに口が開く均整の取れた形状を保っている。加えて焼成が非常に堅緻で洗浄後の劣化もほとんどないなど、整形から焼成まで高度な製作技術が用いられていることが窺えるのである。6世紀は埴輪を使用する古墳が爆発的に増加して埴輪が大量生産されるため、乾燥工程を短縮したり整形を簡素化するなど簡略な作りの円筒埴輪が主流となる傾向があるだけに、舟塚古墳の円筒埴輪の特殊さが際立っているといえる。

3. 交流を物語る埴輪

では、この円筒埴輪群の系譜を考えてみよう。ここで注目されるのは、舟塚古墳の西側造り出し付近で検出されている円筒埴輪である。大きさ・外形・製作技法など形態的な特徴は他の円筒埴輪と異なる点はないが、胴部4段目と5段目に斜格子文様がヘラで描かれた個体である（写真2）。舟塚古墳では他に文様や絵画、記号のある個体は確認されておらず、かなり特別な存在である。円筒埴輪に描かれた記号や文様としては舟塚古墳よりも年代的に先行する同じ旧玉里村内の権現山古墳に須恵器工人系の文様とされる波状複線が描かれる資料がある。また、高浜入り対岸のかすみがうら市富士見塚1号墳にも同じ波状複線の文様をもつ個体があり、かつ斜格子文様を最上段や2段目に描く4条突帯と3条突帯の円筒埴輪が存在しているのである（本田ほか2006）。こうした文様を描く円筒埴輪は数が少なく分布が非常に限られていることから、高浜入りの両地域が埴輪製作において密接な関係にあったと推測できよう。ただし、富士見塚1号墳の文様は他に綾杉文や複合鋸歯文など種類が多様で、なおかつ文様帯の如く突帯間を全周するように描かれるのに対し（杉山ほか2006）、舟塚古墳の例は残存状況を見るかぎり横幅約15cmの中に収まりヘラ記号に近いあり方を示す点で違いがある。

そこで斜格子文のヘラ記号の類例を見てみると、大阪府高槻市の新池埴輪窯で用いられる多様な線刻とヘラ記号のうちのひとつに斜格子がある。6世紀代で6条以上の突帯を持つ円筒埴輪が確認されている埴輪窯としては、新池埴輪窯と大阪府堺市の日置荘埴輪窯が知られており、後者は前者の技術系譜を受け継ぐと考えられている。前者は5世紀後半から既に生産を開始している窯で、付近の大王墓に埴輪を供給しその中には今城塚古墳も含まれるが、窯から出土している6世紀代の資料は均整のとれた形状を維持し、外面・内面で舟塚古墳の資料と完全に一致するものはないものの、非常に近似している（森田編1993）。また、重要な点として新池埴輪窯で多く出土し、今城塚古墳でも集中して検出されている全国でも10ヶ所ほどしか例のない船の線刻が描かれた円筒埴輪（高槻市教委編2008）が富士見塚1号墳にも1点存在することも見逃せない。こうしたことから、線刻絵画・ヘラ記号から高浜入り周辺の埴輪は新池埴輪窯の資料と関連する可能性が指摘できるのである。

しかしながら、富士見塚1号墳の円筒埴輪は突帯の本数にばらつきがあり、数点の形状が整った資料を除けば個体差や歪みも大きく舟塚古墳や新池埴輪窯の資料群とは様相が異なる。おそらく、数点の手本を製作できるわずかな工人が存在した程度の段階であり、舟塚古墳の時期に至って規格性の高い大形の円筒埴輪を製作しうる組織が突如として形成されたとみることができる。そうした体制が前代に系譜を追うことができないのは、富士見塚1号墳の状況と、権現山古墳では3条突帯の円筒埴輪が主流である点からも首肯されよう。逆に、舟塚古墳より後の系譜に連なるとみられる旧玉里村の滝台古墳や山田峰古墳では本数は不明だが多条突帯と考えられる円筒埴輪片が採集されており（本田ほか2006）、舟塚古墳の埴輪製作工人がその後もこの地域で生産活動を継続したことを示しているのではないだろうか。

以上、舟塚古墳の円筒埴輪はそれまでとは異なる強烈なインパクトとしてこの地域にもたらされ、その系譜は今城塚古墳の埴輪を供給した新池埴輪窯に求められる可能性を指摘した。今回は紙数の関係で触れられなかったが、形象埴輪についても交流を窺わせる点があり、墳丘についても舟塚古墳は今城塚古墳の2/5の相似形であるという（新井2003）。舟塚古墳が位置する高浜入りは、東日本第2位の186mの規模をもつ巨大前方後円墳である石岡市舟塚山古墳を最奥に控える要衝である。その入口を押さえる場所に築かれた舟塚古墳に畿内との関連が強い埴輪が存在するのは非常に示唆的であるといえよう。今後の再整理作業の進展により、さらにその実相が明らかになることが期待される。

主要参考文献

新井　悟　2000「茨城県玉里舟塚古墳の再測量報告－霞ヶ浦沿岸の前方後円墳における今城塚型の築造規格の受容形態の検討－」『駿台史学』第109号　駿台史学会
新井　悟　2003「霞ヶ浦北岸地域における後期古墳の細分」『後期古墳の諸段階』　第8回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会
大塚初重・小林三郎　1968「茨城県舟塚古墳Ⅰ」『考古学集刊』第4巻第1号　東京考古学会
大塚初重・小林三郎　1971「茨城県舟塚古墳Ⅱ」『考古学集刊』第4巻第4号　東京考古学会
小林三郎ほか　2005『茨城県霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係整理のための基礎研究』平成13年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究Ａ（２））研究成果報告書　明治大学考古学研究室
塩谷　修　1997「霞ヶ浦沿岸の埴輪－5・6世紀の埴輪生産と埴輪祭祀－」『霞ヶ浦の首長－古墳にみる水辺の権力者たち－』　霞ヶ浦町郷土資料館
黒澤彰哉　2004『茨城県の形象埴輪』　茨城県立歴史館
高槻市教育委員会編　2008『継体天皇の時代』　吉川弘文館
杉山晋作ほか　2006『茨城県かすみがうら市富士見塚古墳群』かすみがうら市教育委員会・国士舘大学考古学研究室
本田信之ほか　2006『玉里村の歴史』玉里村・玉里村立史料館
森田克行編　1993『新池』高槻市埋蔵文化財調査報告書第17冊　高槻市教育委員会

収蔵室から

赤物玩具 ―あかのおまじない―

極めて幼き時の美は只色にありて形にあらず…[中略]…其色すらなべての者は感ぜず、アツプ（美麗）と嬉しがらゝは必ず赤き花やかなる色に限りたるが如し。…[中略]…四つ五つの子が隣の伯母さんに見せんとていと嬉しがる木履の鼻緒、唐縮緬の帯、いづれ赤ならざるはあらず。こゝろみにおもちや屋の前に立ちて赤のまじらぬ者は何ぞと見よ。白毛黒髪の馬のおもちやにさへ赤き薫の車はつけてあるべし。[以下略]（傍線は筆者）

これは、明治31年（1898）12月刊行の『ホトトギス』に掲載された正岡子規の「吾幼児の美観」の書き出しです。子規曰く、子どもは“赤”を好み、おもちゃには、必ず一部“赤”が取り入れられている、と…子どものおもちゃと赤色には、どのような関係があるのでしょうか？日本の郷土玩具を見渡してみると、一部どころか全体を赤一色で彩色した人形や玩具が全国各地に存在することがわかります。達磨や獅子頭、赤べコ…などがその一例です。これらは“赤物”と呼ばれ、江戸時代は疱瘡除けのお守りとして作られていました。

疱瘡とは、日本における天然痘の古い呼び名で、昭和55年（1980）、WHO（世界保健機構）によって撲滅が宣言され、現在は地球上に存在しません。しかし、江戸時代を通じて、人々、特に子どもにおいては生命を脅かす恐ろしい流行り病でした。全身に大豆大ぐらいの赤い斑点が生じる発疹期にはじまり、膿疱期を経て痂のできる結痂期となり、落痂期で終わります。死に至らないまでも顔面に無惨な痘痕を残すこともありました。

感染症に対して人々が無力であった時代、子どもを思う家族は、疱瘡を除けるお呪いとして、赤物や疱瘡絵（「赤絵」とも呼ばれる赤一色で摺られた絵で、題材としては鍾馗が一番多く、他には八丈島の疫神を退治したという俗信のある鎮西八郎為朝や桃太郎、金太郎などがある）を子どもに与えたのでした。なぜ赤色なのかというと、疱瘡に赤が効くという説があったからです。疱瘡をもたらす疫神は赤色を好むとされ、赤い絵や玩具を子どもに与えることで疫神が子どもから離れ、それらに乗り移って病気が軽くなるという言い伝えが信じられていました。また、江戸時代の医師、香月牛山は『小児必用養育草』のなかで、子どもに疱瘡の症状が出始めたら、屏風や衣桁に赤い衣類をかけ、病気の子どもに赤い着物を着せ、看病人もみな赤い服を身に付けるようにと指示しています。このような疱瘡患者の周囲を赤一色にする風習も、体に出る発疹の色が赤色であるほうが良い（赤であると軽症、黒ずむと重症）という認識があったからと考えられます。その他にも、太古から魔除けとして一般的な赤が結び付けられたのではないかという考えや、疱瘡時の発熱によって生じる赤に対して、同じ赤色をもって闘うなどの説もありました。赤物や疱瘡絵の他にも、疱瘡が軽く済むようにとの願いから、「軽焼」というお煎餅や真赤な鯛の落雁などの菓子を、お見舞いとして差し入れるなど、当時の人々は様々なお呪いを信じ、実際に行っていました。

江戸時代、疱瘡除けの玩具の代表は達磨とミミズクでした。達磨は種痘が普及し疱瘡が根絶した現在では、開運出世、必勝祈願、商売繁盛へと利益を転じ、私たちの生活の中になじみ深いものとなっています。白目のままで売られている達磨を購入し、購入者が願をかけて片目を入れ、願いがかなうと、もう片方の目を入れて両目にするというのが、現代の私たちの用い方です。一方、疱瘡除けの流れを汲む郷土玩具の達磨は、ぱっちりと見開いた、まんまるい目がふたつ描き込まれて売られています。それはなぜなのでしょうか？これも疱瘡という病に大きく関係してきます。江戸時代、疱瘡が目に入って生じる失明は非常に深刻なものでした。甲斐国（山梨県）の医師、橋本伯寿によれば、世の盲人の10人に7～8人は疱瘡によるものであったとのことです。大きく丸い目をした達磨が疱瘡除けに選ばれたのも、目がつぶれないようにとの思いが込められているからです。その用い方も現代とは異なります。店頭には、白目のままで並べるものの買い手がついた時点で両目が入れられました。疱瘡にかかった子どもの親たちは、点睛の大小や位置を自由に注文します。購入者である親が、わが子を思って目の入れ方や形にこだわるのは当然のことでしょう。

一方、ミミズクの赤物玩具はどうなったのでしょうか？残念ながら疱瘡とともに姿を消してしまいました。しかし、雑司ヶ谷にある鬼子母神堂の参詣土産で、東京の郷土玩具としても知られる「すすきみみずく」をよく観察してみると、赤い耳に、ぱっちりとした丸い目、赤い糸で吊るされた赤色の短冊…何か疱瘡と関係がありそうです。『江戸名所図会』巻4の鬼子母神堂の記事をみると、鬼子母神本殿の左手側に「鷲明神」という社殿があり、さらにその解説によれば、鷲明神は正徳の頃（18世紀初頭）に出雲国（島根県）から勧請した疱瘡の守護神であったといいます。現在、鬼子母神堂の境内にこの社殿は残っていませんが、江戸時代の雑司ヶ谷には疱瘡の守護神である鷲明神が確かに存在していました。

＊　　＊

赤物の玩具は、子どもが疱瘡を患っている間は神棚にまつられていますが、疱瘡が終わると川に流されたり焼かれてしまうため、古いものはほとんど残っていません。当時の遺品を目にすることはなかなか難しいのですが、今日でも郷土玩具として全国に生き残り、作られ続けているものがあります。当館でも、三春や仙台の張子の達磨、獅子頭、会津の赤べこのほか、土人形の鯛乗り恵比寿や鹿児島神宮の鯛車などを所蔵しております。

（稲葉久実）

赤物玩具（向って右から時計回りに）会津張子・赤べこ、獅子頭、鹿児島神宮信仰玩具・鯛車、土人形・鯛乗り恵比寿、三春張子・達磨

すすきみみずく

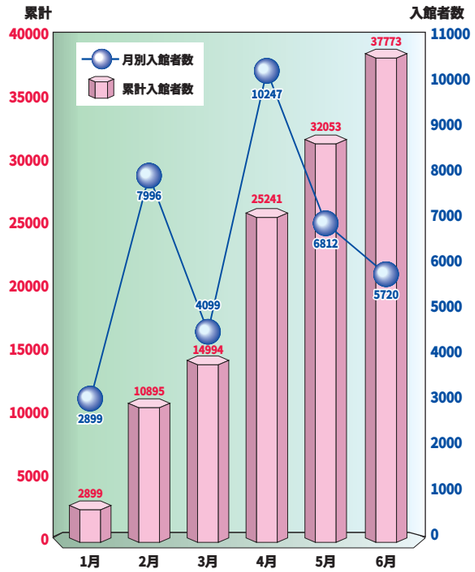
（参考文献）

藤岡摩理子『浮世絵のなかの江戸玩具』社会評論社 2008年

千葉惣次『江戸からおもちゃがやって来た』晶文社 2004年

明治大学博物館入館者数の動き（2008年1月～6月：延べ人数）

2004年4月以降の総入館者累計　223,426人



特別展来館者数内訳		開催日数	来館者数
1/10～1/27	日中考古学交流のさきがけ	18日間	586
2/1～2/19	児玉房子がガラス絵で描く 宮沢賢治の世界	19日間	3244
2/27～3/28	明治大学新収中国石刻貴重拓本III	31日間	949
4/4～4/27	お帰りなさい！　駿河台へ 小栗上野介企画展	23日間	5173
5/4～5/29	〈クール・ジャパン〉を科学する	26日間	2074
6/6～6/29	モノクロ時代の明治大学	24日間	1429

小栗上野介企画展を見学する中曽根元首相（左）と納谷学長（右）

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	1892
講座受講者数	276
黒耀石研究センター利用者数	174

団体見学の記録　2008年1月～2008年6月

【一般】　世田谷区玉川台区民センター運営協議会（30名）・明治大学国際交流グループ（6名）・三ヶ島郷土史サークル（10名）・小金井史談会（32名）・東京保健生協　汐見向丘支部（20名）・明治大学国際交流グループ（5名）・かつみ会（43名）・芝楽会　S35政経学部卒業経済学科2組（35名）・千葉実年大学校　歴史倶楽部（68名）・新世紀塾西毛もみじ会（40名）・前橋芳賀西部工業団地連絡協議会（24名）・句会　滄海（2名）・千代田区立高齢者センター（26名）・全日本同和会　島根県連合会（31名）・人生楽々大学（50名）・明治大学橋本ゼミ分科会（OB会）（15名）・手話サークルまちだ（30名）・歴史散歩会（26名）・明治大学商学部三上ゼミナールOB会（40名）・金の鈴史跡めぐり研究会（15名）・栃木県立鹿沼高等学校PTA（56名）

【小・中学校】　東京都江東区立第3砂町中学校（15名）・東京都足立区立第一中学校（26名）・東京都豊島区立千川中学校2年生（26名）・多摩大学附属聖ヶ丘中学校（57名）・宮城県白石市立白石中学校（35名）・青森県八戸市立長者中学校（15名）・愛知県名古屋市立神沢中学校（15名）・宮城県高崎中学校（36名）・宮城県稲井中学校　3年生（5名）・静岡県長泉町立北中学校（9名）・福井県福井市明倫中学校（18名）・大野中学校（7名）・三重県四日市市立常磐中学校（6名）・愛知県知多郡美浜町立河和中学校（4名）・愛知県知立市立知立南中学校（4名）・東京都練馬区立開進第四中学校（6名）

【高等学校】　長野県飯山北高等学校（39名）・和洋九段女子高等学校（20名）・神奈川県立秦野高等学校　3年生（54名）・神奈川県立新城高等学校　1年生（14名）・成城学園高等学校　3年生（11名）・埼玉県立羽生第一高等学校（7名）・千葉県立我孫子高等学校（26名）・千葉県立柏の葉高等学校（8名）・駒沢大学高等学校　2年生（21名）・千葉県立船橋西高等学校（50名）・神奈川大学附属高等学校（53名）

【大学・大学院・専門学校】　外語ビジネス専門学校（33名）・比治山大学（30名）・早稲田大学文学学術院文学部日本史コース（70名）・福岡県立大学　中国人留学生（4名）・埼玉学園大学　博物館概論履修生（10名）・早稲田大学法学部水島朝穂ゼミ（35名）・恵泉女学園大学（13名）・放送大学神奈川センター（19名）

M２カタログ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第１２弾は十手ストラップをご紹介します。

ストラップ（十手）　価格：1,100円

「御用だ！御用だ！」時代劇で手向かう悪党に捕手が振りかざす十手をかっこいい！欲しい！と思ったことはありませんか？そんなあなたの望みをかなえるべく、なんと十手をストラップにしちゃいました。流線形の美しいフォルムと、メタルの落ち着いた輝きがクールな現代の十手。当館蔵の珍しい如意十手をモデルにしました。いつものケータイをかっこよく、かつ個性的に演出してください。普通のストラップの飽きた方にも最適です。

売り上げベスト３
（2008年1月～6月）

1位	『常設展ガイドブック』	800円
2位	ポストカード「ニュルンベルクの鉄の処女」	90円
3位	ポストカード「明大記念館　縦」	90円

MUSEUM EYES
2008 Vol.51 ミュージアム・アイズ
明治大学博物館 MUSEUM EYES（ミュージアム・アイズ）第51号
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 【TEL】03-3296-4448 【ホームページ】http://www.meiji.ac.jp/museum/
2008年10月1日発行 ＜印刷＞図書印刷株式会社 ＜第51号製作スタッフ＞日比生代子・島田和高

明治大学博物館友の会への誘い

博物館
友の会から

当会は1988年6月25日、明治大学考古学博物館が主催した、一般向けの考古学ゼミナールの受講生の有志により、明治大学考古学博物館友の会として発足し、2004年4月に明治大学商品博物館、刑事博物館、考古学博物館の三館が合併し、明治大学博物館となったのに併せて、明治大学博物館友の会なり、本年で20年目を迎えました。

発足当時の会員数は150名でしたが、ここ10年間は350人から370人程度を推移しています。

発足の経緯からと現在の友の会となった母体が明治大学考古学博物館友の会であった事から考古学関係の講演会や見学会の行事が多くなっている現状ですが、今後は商品・刑事関係の講演会や見学会も多く開催するようにしていきたいと思います。

当会は博物館のご協力を得ながら講演会や見学会の開催を会員の自主的な運営で行っております。

定番となっている講演会としてはその年の考古学の話題をテーマとした、「日本考古学20〇〇」を例年、原則として4月の第2土曜日に行っており、後日、その講演内容を冊子に纏め、会員に配布しております。冊子は万一聴講出来なかった時や講義の内容をもう一度確認することが出来、好評です。

見学会は関東地方を中心にバスによる遺跡・博物館の日帰り見学会、宿泊を伴う見学会も実施しております。2007年度は「赤城山麓の古墳を訪れる」「北関東の旧石器・縄文の遺跡を訪れる」「霞ヶ浦周辺の古墳を訪れる」が開催され、「名古屋市立博物館・南山大学博物館と弥生遺跡」の見学会と一泊で開催しました。その他発掘現場見学会や特別展に関連した見学会も行いました。

会員同士が立ち上げた分科会「古文書を読む会」「平成内藤家内藤家文書研究会」「工芸の会」「石器文化研究会」「弥生文化研究会」「草生水の会」があり、活発な活動をおこなっております。

博物館をサポートする活動としてボランティアによる博物館図書室管理・展示解説をおこなっております。博物館図書室管理員は博物館図書室で1日じっくり本を読みたいという方に、展示解説員は博物館の展示内容を学び、学んだことを基に来館者に説明し、来館者に少しでも喜んで頂き、自分も更に知識を深めたいという方にはお勧めです。

会員になられた方への特典として明治大学博物館図書の閲覧、明治大学図書館図書の閲覧、明大12号館三省堂書店の割引購入、明治大学博物館主催の展覧会・講座などの優待、友の会主催行事への参加、会報などの情報の提供があります。

年会費は一般会員3,000円、家族会員（一般会員と同一住所の方）1,500円、学生会員1,500円です。

「入会のご案内」を用意しています。その中に郵貯銀行の「払込取扱票」をご利用頂き、お振り込み頂くと会員となり、会員証がお手元に届きます。

さあ、あなたも会員となられ、共に学び、共に見学し、語り合い、生涯学習の道を歩もうではありませんか。

（友の会会長　長野　陽次）

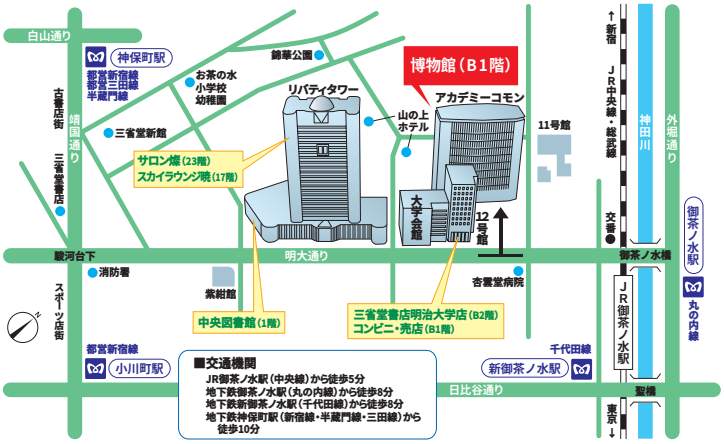
博 物 館 案 内

【博物館案内】

◆開館時間
10：00～16：30（入館16：00まで）
◆休館日
夏期休業日（8/10～8/16）
冬期休業日（12/26～1/7）
8月の土・日に臨時休館があります。
※開館時間・休館日には変更の場合があります。
◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

◆開室時間
月～土　10：00～16：30
◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記　ミュージアムアイズ51号をお届けします。51号の特集頁は2008年度特別展「氷河時代の山をひらき、海をわたる－日本列島人類文化のパイオニア期－」です。展示では、日本列島に初めて足を踏み入れたのは誰なのか？？という壮大な謎に迫ります。是非明治大学博物館まで足をお運び下さい。（ひ）